

発表 5

Presentation 5

奄美における人口移動と「場所の力」

田島 康弘*

鹿児島大学

Population Movements and “Power of Place”

Yasuhiro TAJIMA *

Kagoshima University

This paper invokes the “power of place” to explain population movements in Amami District, Kagoshima Prefecture. The Symposium organizers pointed out two distinct elements in the concept of “power of place”. These are the power of concentration on one hand, and the power of dispersion on the other. I shall discuss the power of concentration in the first half of my paper, and the power of dispersion in the second half, using my own investigation data on population movements among Amami people.

I use the “power of concentration” to explain population movement from the rural area of Amami Islands to the central district of Naze City, and I stress the role of the voluntary associations which were established by these immigrants living in Naze City. I also explain “complementarily” two kinds of return migration--firstly of retired people who were born in Okinoerabu Island but had emigrated to big cities such as Tokyo and Osaka; and secondly of descendants of Japanese emigrants to Brazil.

To illustrate the “power of dispersion” my research focussed mainly on people in Onotsu Village, Kikai Island, who emigrated first to Osaka and then, often, to Tokyo or even to the U.S.A. I also note those emigrants who left Uken Son in Amami Oshima for Brazil, mainly before the Second World War.

I found three factors or motive forces underlying dispersion power. The first factor is individual persons’ effort to re-establish their lives in the process of emigration and take up an urban life style. The second factor is the concentrating power of voluntary associations. The third is the existence of “successors” who, having migrated in earlier times, can take care of new immigrants in big cities.

*E-mail address: tajima@edu.kagoshima-u.ac.jp

田島と申します。皆さん方のお手元にはないのかもしれませんが、シンポジウム提案の趣旨（编者注：本書「まえがき」参照）という文書がありまして、その提案の文章で私が、まずこのテーマをどのようにとらえたかということから話を始めたいと思います。

其の前に、私の全体の話としては、それを最初にして、前半は主に、名瀬市にできている奄美各集落からの郷友会（きょうゆう会、ごうゆう会）、その実態について報告しながら、趣旨説明の文書の中にあつた、凝集力というものについて、その話を中心にしたと思っています。後半はこれもその中であつた展開力について実態を示しながらお話ししたいと、最後に若干のまとめをしたいと思っています。

趣旨説明文書に対して感じたことですが、まず、テーマは海と陸のはざまでの「場所の力」とあり、ダッシュの後、南九州と南の島々からの視座とこうあります。海と陸のはざまというのは私はあまり意味が、南九州と南の島々という言葉もありますから、だぶっているのではないかと感じました。場所の力というほうが中心であろうと。場所の力というのがですね、最初感じたのは、地域性という地理学の言葉とどこが違うのかなというのを感じたのですが。地域性と違うのは、場所という言葉も違うわけですが、主に力の方が違うかなと。力とは一体何だろうかというのを考えたわけですが、ベクトルという言葉もその中でさらにその後の説明でも使われていますが、ベクトルというと大きさと方向をもつものだ。方向については、内へ向かうのか、外へ向かうのかと、それでいいのかと思ったのですが、大きさの質は一体何だろうかということを考えました。

結論はちょっと出ないのですが、あるいは後にしまして、とにかくそういう問題がここにあるのかなと。それからサブタイトルの南九州と南の島々からの視座と。からのというのは要するに外からではないと、外というのは南九州以外ということでしょうが、中央が強いのかなという気もしましたし、南以外のほかの地域ということなのでしょう。あまりそういうことは吟味しても仕方がないのかもしれませんが、最初にこのテーマをいわれた時に、はてこれは何なのかと考えさせられましたので、ちょっと言わせてもらいました。その後、趣旨説明、もう少し長い文章があるのですが、そこで場所の力についてある程度説明、あるいは規定がされていると思います。それは次の3点にわたっています。一つは、その場所の人々のアイデンティティーに支えられているというような文章があります。その場所の力とはですね。私はそこから感じたのは、人が場所の力を支えているといいいますか、一見するともっと自然条件的な、環境的なものと考えているのかなという気もしたのですが、そうではなさそうだと、オーガナイザーの考えではですね。人が支えている、人が中心になっているなど。2点目はもっとはっきりと社会経済的な性格を持つ、あるいは民族文化的な性格を持つといっていますので、そういうものだ。自然というよりは社会文化的なものだと。3点目は内に向かう凝集力と外に向かう展開力の二つの力の渦の形をとっていると。そういうことが書かれているわけですね。私としては3点目の内に向かう凝集力、外へ向かう展開力この二つにこだわって、今回の報告はさせていただこうかと考えています。

二つの力についてはもう少し説明がありまして、凝集力の方ですね、内に向かうベクトルといっているわけですが、具体的には例えば、一つは地域社会の結合関係の強化であるというふうにいっているわけですね。もう一つ、2番目には自然と人間との関係性の進化であると、この二つを具体的にはあげています。2番目の自然と人間との関係性の進化というのは、多分第1次産業のようなことをいっているのかなと私は考えました。私のテーマからするとこの面については少し離れるので主として1番目の結合関係の強

化ですね、この点についての話をいたします。

もう一つの展開力ですが、外に向かうベクトルということですが、これについては2つのことをいっているのではないかと思います。一つは南の島々への眼差しと南の島々からの眼差しによって展開されてきた交流過程といっているのですね。要するに南への方向性の何かだと。南との関係だととらえられるのかと思いました。2番目は九州本土、日本の中央への眼差しによって展開された諸現象といっています、これはどっちかというとな北というか中央というか、この二つの方向、南と北の二つの方向で展開力というのをここでは述べているなど私は考えました。

これについては後で問題提起させていただきたいのですが、一応これに沿って、私の報告はいたします。展開力の方もですね。

それから、趣旨説明の中で場所の力というものを具体的にイメージできるような事例を通して示すことができるかということを行っています。そういうことを言っているということをやっと触れておきたい。最後に結論というか最終的なねらいなのかなと思ったのですが、場所の現在を活写する試みである、地理学的な試みである、こういうことを言っているのですね。これは私の今まで使ってきた言葉でいうと動態地誌というか、地誌と言う言葉のイメージはあまりよくないのかもしれませんが、地域の現実を生き生きと描くとそういうことと何か非常に近いのではないかと感じました。果たして、そこがほんとにねらいなのかあるいは場所の力そのものがよりねらいなのか、そのへんはよく分かりませんでした、私としてはそのようにとらえたということですね。

それでは具体的に凝集力と展開力についてなのですが、以下の報告は、奄美等でやってきた調査に基づいて、その中で今回のテーマと関わるかなという範囲で資料を紹介するという形でさせていただきます。内に向かうベクトル、凝集力については予稿集では名瀬市における凝集力、これを中心に今日は前半を紹介したいと思います。Uターン者

表1 郷友会の成立年

成 立 年	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
戦 前	3	4	1	1	2		4	15	
1946～50	5	4	2	1	1	1	1	15	33.3
51～55	2	1	2		2		1	8	17.8
56～60	2	1	4	1		1		9	20.0
61～65					2			2	4.4
66～70					2			2	4.4
71～75	1	1		3				5	11.1
76～80	1			2				3	6.7
81～85									
86～			1					1	2.2
計	11	7	9	7	7	2	2	45	100.0
不 明	2	2		1		1	4	10	
総 計	13	9	9	8	7	3	6	55	

出典：田島（1995）

注1）記号は次の略である。K：笠利町，T：奄郷町，N：名瀬市，S：住用村，Y：大和村，U：宇検村，他：その他。

また、その他の6の内訳は、徳之島町の集落の郷友会が4、喜界町の集落の郷友会が1、それに与論町の郷友会が1である。

表2 会の目的

目 的	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
親睦	13	7	8	6	6	3	4	47	97.9
郷里の発展への寄与	10	7	8	4	3	2	2	36	75.0
郷土愛の高揚	9	6	5	5	4	2	2	33	68.8
相互扶助	8	5	6	3	5		1	28	58.3
伝統文化の保存・継承	5	4	4	2	6	2	1	21	43.8
生活・社会的地位の向上	4	2	1		3		1	11	22.9
青少年の健全な指導・育成	1	3	1	2	3			10	20.8
その他			1	1	3			2	4.2
回答した会の数	13	7	9	6	6	3	4	48	100.0

出典：田島(1995)

注1) その他は長寿慰安及び郷里との交流であった。

表3 会則の制定年

制定年	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
戦前					1			1	2.6
1946～50	1	1	1					3	7.9
51～55	4				2		1	7	18.4
56～60	1	1	4				1	7	18.4
61～65	1	1	1	1	1			5	13.2
66～70	1				1			2	5.3
71～75	1		1	3				5	13.2
76～80	3	1	1				1	6	15.8
81～85							1	1	2.6
86～			1					1	2.6
計	12	4	9	4	5	2	2	38	100.0
会則なし	1	2			1			4	
不明		3		4	1	1	4	13	
総計	13	9	9	8	7	3	6	55	

出典：田島(1995)

についてもこの中に位置付けたいと。これについては、今日の報告では、沖永良部島の定年退職後のUターン者について少し事例を話したいと思います。3点目はブラジルからの来住者ですが、これは簡単に少しふれます。4番目のフィリピンからの女性が来てるわけですが、時間があれば紹介するつもりでしたが、省略します。後半の展開力の方ですがこれについては、関西や東京へとむかう人の動き、ここを中心に、特に東京への、ほんの一つの小さな集落ですが、その事例を話したいと思います。次の北アメリカへと、これは若干ふれたい、最後の南米も若干ふれる程度にさせてもらいます。

最初の凝集力の一つの中心として話したいのは名瀬の周辺から名瀬市に移住した人々でつくられている郷友会についてです。これは名瀬市の郷友会の各会長さんに対してアンケートした結果ですが、いつごろ名瀬市の郷友会が成立したか、数はここにあるように、55になり、調査したのは45です(表1)。戦後間もない時期にできたものが多い。大体50年代までですね。時期はこういうようなことになります。それから、最初に表2の

表4 会旗の製作年

製作年	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
戦前		1			2			3	10.3
1946～50	1							1	3.4
51～55	1	1						2	6.9
56～60	1		1					2	6.9
61～65	1	1	1				1	4	13.8
66～70				1	1		1	3	10.3
71～75	3	1	1	2	2	1		10	34.5
76～80	2					1		3	10.3
81～85									
86～						1		1	3.4
計	9	4	3	3	5	3	2	29	100.0
会旗なし	3	4	5	1	2		2	17	
不明	1	1	1	4			2	9	
総計	13	9	9	8	7	3	6	55	

出典：田島（1995）

表5 現在の会員数（世帯）

世帯数	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
50以下				1	2	1	1	5	10.0
51～100	3	3	3	2		2	2	15	30.0
101～150	4	3	4	1	2		2	16	32.0
151～200	3		1		2		1	7	14.0
201～250	1	2		1	1			5	10.0
251～300	1	1						2	4.0
計	12	9	8	5	7	3	6	50	100.0
不明	1		1	3				5	
総計	13	9	9	8	7	3	6	55	

出典：田島（1995）

横軸の記号をいいますと、笠利、龍郷、名瀬、住用、大和、宇検その他の市町村別の略語です。数字は回答した郷友会の数ですね。目的はこういうふうになっていて、親睦が多いのですが、その他こういうような回答があったということになります。細かいかもしれませんが、表3これは会則の制定年、成立してすぐこれができたというわけではないということだけをですね。しばらくたってからですね、1950年代、あるいはもう一つのピークはちょっと後の1970年代にあるということもみられそうなわけですが。旗、会旗をいつごろ作ったかと、これは会則よりもっと遅れているというのがわかりまして、郷友会というものが次第に形成されてきたという経過がわかるのではないかということです（表4）。会員数、現在というのは94年、6年位前の人数が50から150人位ですか、あるいは、大きいのはもっと大きい、こういう単位で会が成立している（表5）。組織率というのは、各集落から名瀬へ出てきた全員の中で郷友会の会員である人の率ですね。これも80パーセント台というのが一番多いわけで、組織率はかなり高いといっているの

表6 各郷友会の組織率

組織率	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
100%	1				1		3	5	11.1
90~	3	5	1	1	1			11	24.4
80~	6	1	1	3	3	1	2	17	37.8
70~		3	1					4	8.9
60~	1		2		1	1		5	11.1
50~	1							1	2.2
40~					1			1	2.2
30~			1					1	2.2
計	12	9	6	4	7	2	5	45	100.0
不明	1		3	4		1	1	10	
総計	13	9	9	8	7	3	6	55	

出典：田島（1995）

表7 会の諸活動（行事）

行事	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
総会	13	9	9	7	7	3	6	54	98.2
敬老会	12	9	8	6	5	3	6	49	89.1
八月踊り	11	9	9	6	5	3	1	44	80.0
運動会	8	7	6	5	5	3	3	37	67.3
奄美祭り行事への参加	7	5	6	1	3	2	2	26	47.3
忘年会	6	5	4	2	4			21	38.2
新年会	2	3	1	3	2		4	15	27.3
野球・ソフトボール	5	4	1	2	4		1	17	30.9
バレーボール	2	2		2	2			8	14.5
相撲	4	6	2	1	1	1		15	27.3
レクリエーション	5	1	3	1	4		1	15	27.3
旅行	2							2	3.6
慶弔見舞	12	9	7	5	4	3	5	45	81.8
回答した会の数	13	9	9	8	7	3	6	55	100.0

出典：田島（1995）

はないかと思われま（表6）. 中には低いのもありますが、会の活動ということですが、総会は殆どの会がやっていますが、敬老会、八月踊り、運動会、この3つですね。このあたりが会の活動の中心になっているということですね（表7）。特に運動会というのはなかなかエネルギーがいることですが、これをやってる会もかなりあるということが分かります。

それから、会を支える内部集団ということを見ますと、要するに、青年部、婦人部ということですね。これが各会の中でできていて、そういうものが会を支えているということもわかります（表8）。それからその内部集団の成立時期を見ますと、決してやはり最初からではなくて、70年代以降であるというようなことがわかります（表9）。形成されているといいますが、動いているというような状況が分かるかなと思います。それから会の財政規模をみると大体、50万円未満というのが多いのですが、100万円以上の大

表8 会の内部集団

内部集団	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
青年部 ¹⁾	9	6	5	6	4	2	1	33	60.0
婦人部	7	6	3	5	7	2	3	33	60.0
壮年部	2	3	1	2	2	1		11	20.0
八月踊部	3	3	1	1				8	14.5
模合集団 ²⁾	1	1	2				3	7	12.7
居住地集団	2				1			3	5.5
その他 ³⁾					1			1	1.8
郷友会数	13	9	9	8	7	3	6	55	100.0

出典：田島（1995）

注1）青年部の年齢は40歳以下など高いようである。

2）1つの会で地区別に複数の集団を持つ会もある。

月1回、5,000円程度の積みたてで行われている。

3）これは同窓会である。

表9 内部集団の成立時期

	青年部	婦人部	壮年部	八月踊部	模合集団	居住地集団	その他	計
1946～50		2			1			3
51～55		1			2	1		4
56～60	2	1	1			1		5
61～65	1	1	1	2				5
66～70	3	2	2					7
71～75	11	7	3	2	2			25
76～80	4	6	1	2				13
81～85	6	6	1			1		14
86～	1	3						4
計	28	29	9	6	5	3		80
不明	5	4	2	2	2		1	16
総計	33	33	11	8	7	3	1	

出典：田島（1995）

表10 会の財政規模

金額	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
50万円未満	3	7	6	6	6	3	3	34	64.2
50～100	7	2	3	1			1	14	26.4
100～150	1				1			2	3.8
150～200	1							1	1.9
200万円以上							2	2	3.8
計	12	9	9	7	7	3	6	53	100.0
不明	1			1				2	
総計	13	9	9	8	7	3	6	55	

出典：田島（1995）

表11 会費の徴収状況

徴収状況	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
徴収していない	11	9	4	3	4	1	3	35	63.6
徴収している	2		5	5	3	2	3	20	36.4
会費の金額	3000円			1				1	5.9
	2500			1			1	2	11.8
	2000	1		3	1		2	8	47.1
	1000				1	3		5	29.4
	200			1				1	5.9
	不明	1		1	1				3
								17	100.0

出典：田島（1995）

表12 郷里の行事への参加状況

行事(開催月)	K	T	N	S	Y	U	他	計	参加する会の比率(%)
敬老会(7~10)	9	6	6	7	4	1	1	34	63.0
相撲大会(9~11)	4	5	7	3	4	2		25	46.3
八月踊り(8~10)	4	2	7	7	2		1	23	42.6
十五夜祭り(8~10)	3	3	2	7	4	1		20	37.0
豊年祭(9~10)	3	2	2	4	5	3		19	35.2
種下し(9~11)	6	7						13	24.1
運動会(7~11)	4	1	2	3	3			13	24.1
盆踊り(7~9)	1	3	2	3	1	1		11	20.4
舟漕ぎ競争(5~8)	3		3		1		1	8	14.8
浜下り(5~6)	5	1		1			1	8	14.8
その他 ¹⁾		1					2	3	5.6
回答した会の数	12	9	9	8	7	3	6	54	100.0
不明	1							1	
総計	13	9	9	8	7	3	6	55	

出典：田島（1995）

注1)その他は、安木屋場の今井権現の祭り(10月)、及び与論の産業祭(12月)、海開き(3月)である。

きいのもあります(表10)。会費の徴収状況ですが、徴収していない会がむしろ多いわけです(表11)。徴収している会は3分の1位なのですが、その額の分布をみると2千円程度が多いということです。徴収していない場合の運営は殆ど寄付ということになります。徴収している場合でも寄付の比率はかなり高いといってもいいかと思われます。郷里というのは名瀬から例えば笠利のある集落ですね、その行事への参加状況、郷里の集落で何かあるときにそこへ戻るかどうかということを知りたいのですが、それもかなり高いといってもよろしいでしょうか(表12)。敬老会などはかなり高い、後は表に見られるような様子です。郷里とのつながりもかなりあるといえるかと思えます。逆に名瀬で会をやる場合に郷里の人を招くかどうかという逆の動きを見ますと、そんなに高くはないかもしれませんがそんな動きもあるということですね(表13)。最後に、ちょっと問題点なのですが、若い世代への対策といえますか、若い人があまり来ないという声をよく聞くわけですが、それに対してどういう対策をしていますかという質問の答えです(表14)。

表13 郷里の人を招いて行う行事

行 事	K	T	N	S	Y	U	他	計	招く会の比率(%)
八月踊り	6	7	5	5	2	1		26	48.1
敬老会	8	8	4	2	2		1	25	46.3
運動会	6	2	2	1	3	1		15	27.8
総会	1	5	2	1	1		1	11	20.4
奄美祭り	1		1					2	3.7
バレーボール大会				2				2	3.7
忘年会		1						1	1.9
レクリエーション				1				1	1.9
回答した会の数	12	9	9	8	7	3	6	54	100.0
不 明	1							1	
総 計	13	9	9	8	7	3	6	55	

出典：田島（1995）

表14 若い世代への対策

対 策	K	T	N	S	Y	U	他	計	割合(%)
球技大会の開催	5	5	2	2	3		2	19	38.0
情報収集と会への勧誘 ¹⁾	3	5	1	4	1	2		16	32.0
青年部活動の重視	5	3	1	1	2	2	1	15	30.0
伝統芸能活動	3	3	1		3	1		11	22.0
2世会の結成	1		1	1	2			4	8.0
2・3世を伴う帰郷	1	1						2	4.0
その他 ²⁾							2	2	4.0
特に何もしていない	1	2	4		2		2	12	24.0
回答した会の数	11	9	7	7		3	6	50	100.0
無 回 答	2		2	1				5	
総 計	13	9	9	8	7	3	6	55	

出典：田島（1995）

注1）郷里出身者が結婚した際に入会を勧めるという会もあった。

2）「諸行事へのなかば強制的な参加勧誘」および「鹿児島との交流」である。

球技大会とか青年の確保をそれなりにやっていると言うことが出てきます。

その次に凝集力のもう一つの例としまして、沖永良部の定年後帰郷者の報告を若干させていただきますが、これは調査の方法は役場を通して、それから各区長さんを通してどのくらいおられますかと、基本的には定年後ということをお願いした調査ですが、実は若い人も入ってしまってますが、いつごろ帰って来たかということについてはこういう結果でした（表15）。調査した全体の数は32、33ということ。こういう調査をしたのは全部90年代ですが、96年位でしたか。「何歳の時に帰ってきましたか」と、Uターン者を対象にした調査ですが、60代と50代の後半が多いということが分かります（表16）。前はどこに住んでいたのか。沖永良部は、阪神、特に臨海部の大企業の就業者が多いという特徴もあります。そのせいかもしれませんが、阪神が一番多かった（表17）。京浜もやはり多い。最初は阪神の大企業に就職したけど、会社の中で移動したというケースが見られます。水島とか半田もそうですね。次に、帰郷した時に夫婦なのか一人なの

表15 帰郷年

年	和泊	知名	計	割合(%)
1945～49		1	1	3.1
50～54				
55～59				
60～64				
65～69				
70～74				
75～79	1	3	4	12.5
80～84	7	3	10	31.3
85～89	5	4	9	28.1
90～94	3	4	7	21.9
95～	1		1	3.1
小計	17	15	32	100.0
不明		1	1	
計	17	16	33	

出典：田島（1996）

表16 帰郷時の年齢

年齢	和泊	知名	計	割合(%)
25～29		1	1	3.1
30～34		1	1	3.1
35～39				
40～44				
45～49	1		1	3.1
50～54		2	2	6.3
55～59	5	4	9	28.1
60～64	9	3	12	37.5
65～69	1	3	4	12.5
70～74	1	1	2	6.3
小計	17	15	32	100.0
不明		1	1	
計	17	16	33	

出典：田島（1996）

かを聞いたのですが、これは夫婦が多かったということです（表18）。帰郷の理由で一番多かったのは父母の世話ということですね（表19）。これは数としても多かったのですが、実際聞き取りした中でもこの理由が非常に強いなという感じも受けています。出郷先での郷友会との関わりですね、これを見ますと、かなり関わっていたこと、役員だったとかよく出席したとかが非常に多いわけで、関わっていたという結果が出ています（表20）。郷友会をどう思っていますか、思い出は何ですかということ聞いてみたら表21のような結果でした。また、郷友会に対する意見ですね、全体としては非常にいいものであったという意見が出ているかなと思います（表22）。

凝集力の中で、1996年7月現在で、6組のブラジル女性とのカップルが生まれています。

表17 帰郷直前の居住地

		和泊	知名	計	割合(%)
阪 神	神戸	2	1	3	
	戸崎	1	2	3	
	西宮	1	2	3	
	大阪		3	3	
	奈良		1	1	
	小計	4	9	13	40.6
京 浜	東京	6	1	7	
	千葉	2		2	
	川崎	1		1	
	横浜		1	1	
	横須賀		1	1	
	小計	9	3	12	37.5
そ の 他	福井	1			
	北九州	1			
	鹿児島	1			
	沖縄	1			
	半田		1		
	岐阜		1		
水島		1			
	小計	4	3	7	21.9
計		17	15		100.0
不明			1		
総計		17	16	33	

出典：田島（1996）

表18 帰郷時の随伴者

随伴形態	和泊	知名	計	割合(%)
1人	6	4	10 ¹⁾	32.3
2人	9	9	18 ²⁾	58.1
3人以上	1	2	3 ³⁾	9.7
小計	16	15	31	100.0
不明	1	1	2	
計	17	16	33	

出典：田島（1996）

注1) 1人暮らしだった者は5人（和泊3，知名2）で，他の5人は妻帯者で，帰郷時が2人でなかったにすぎない。

2) 全員妻と2人である。

3) 妻と母，妻と子供2人，複数の子供の3例である。

表19 帰郷の理由

理 由	和泊	知名	計	割合(%)
父母の世話	6	5	11	22.0
定年退職	6	3	9	18.0
土地・家・墓を守り引きつぐ	6	3	9	18.0
健康上の理由 ¹⁾	1	4	5	10.0
老後の暮しに備えて ²⁾	2	2	4	8.0
生れ故郷であり、恋しい	1	2	3	6.0
仕事上の理由 ³⁾		3	3	6.0
家庭内の事情 ⁴⁾	1	1	2	4.0
もともと帰るつもりだった	1		1	2.0
海洋研究	1		1	2.0
家を建てるため		1	1	2.0
震災にあったため		1	1	2.0
計	25	25	50	100.0

出典：田島(1996)

注1) 自分が妻の病弱を理由とするもの、また「空気が悪い」もここに含めた。

2) 「老後ののんびり暮すため」の他に「老後に備えて、自己退職をした」を含む。

3) 「仕事がいやになった」、「国家試験に失敗した」、「終戦直後で職がなかった」の3件。

4) 「子供がいなかったので」と「孫が大きくなったので」の2件。

表20 郷友会とのかかわり

か かわ り	和泊	知名	計	割合(%)
幹事等の役員だった	6	4	10	33.3
よく参加・出席した	6	7	13	43.3
ときどき出席した	1		1	3.3
たまに出席した	1	1	2	6.7
会員だったが、参加せず	2	1	3	10.0
非会員、会にかかわらなかった		1	1	3.3
小 計	16	14	30	100.0
不 明	1	2	3	
計	17	16	33	

出典：田島(1996)

表21 郷友会の思い出

思 い 出	和泊	知名	計	割合(%)
はげまし合い、心の支えとなる会だった	2	1	3	23.1
敬老会・運動会		3	3	23.1
旅行などが楽しかった	1	2	3	23.1
島言葉で語り会える楽しみ	1		1	7.7
島から来た人のめんどうをみた	1		1	7.7
若者の参加(集まり)がほしい	1		1	7.7
奄美復帰運動		1	1	7.7
計	6	7	13	100.0

出典：田島(1996)

表22 郷友会に関する意見

意見	和泊	知名	計	割合(%)
今の様に発展させてほしい, はげまし合う会なので	4	3	7	31.8
今の若い者は出てこない, 関心がない	4	2	6	27.3
田舎の人の集まりはあった方がいい	3	1	4	18.2
現在は2世中心, 3・4世も墳墓の地を忘れぬように	1	1	2	9.1
方言を話す場だ, 子・孫にも伝えて	1	1	2	9.1
以前は仕事のめんどうなどもみていた	1		1	4.5
計	14	8	22	100.0

出典：田島(1996)

表23 36年間の総出郷者の居住地(1938年7月末)

	居住者数	割合
関西	301 ^人	61.7 [%]
関東	56	11.5
鹿児島県(除大島郡)	20	4.1
大島郡(除喜界島)	4	0.8
喜界島(除小野津)	15	3.1
その他の国内 ¹⁾	22	4.5
アジア ²⁾	37	7.6
アメリカ ³⁾	33	6.8
合計	488	100.0

出典：田島(1990a)

注1) この内訳は第2-7表に示す。

2) この内訳は第2-8表に示す。

3) アメリカ33人のうち, 南米(ブラジル)2人を含む。

資料：文園(編)(1939)

表24 関西居住者の職業

男			女		
職業	人数	割合	職業	人数	割合
船員等	92 ^人	47.7 [%]	家事	41 ^人	55.4 [%]
職工・鉄工所	59	30.6	職工	26	35.1
会社	14	7.3	看護婦	5	6.8
商業・店員	13	6.7	商業・店員	2	2.7
公社・公務	6	3.1	計	74	100.0
警官	3	1.6	不明	16	
運転手	3	1.6	総数	90	
その他	3	1.6			
計	193	100.0			
不明	18				
総数	211				

出典：田島(1990a)

注) 男子「会社」の中には一部, 鉄工所勤務も含まれているようであるが区別できなかった。

資料：表23と同じ

表25 関東居住者の職業

男			女		
職業	人数	割合	職業	人数	割合
印刷関連業	12 ^人	28.6%	家事	9 ^人	81.8%
鉛版	7		事務員	2	18.2
印刷	3		計	11	100.0
製本	2				
塗粧業	9	21.4			
船員	9	21.4			
職工	3	7.1			
運転手	2	4.8			
自動車会社	2	4.8			
その他	5	11.9			
計	42	100.0			
不明	3				
総数	45				

出典：田島（1990a）

資料：表23と同じ

表26 在米小野津出身者の居住地

居住地	職業					計
	商業	ホテル	家事	不明		
シアトル				1		1
サンフランシスコ		2	1			3
ロサンゼルス	2			1		3
ニューヨーク	3					3
スタンフォード	2					2
不明			1	18		19
計	7	2	2	20		31

出典：田島（1990b）

資料：文園（編）（1939）より作成

表27 渡米者の対応

	人数	割合
正岡氏記憶者	52 ^人	(100.0)%
A 戦前帰国者	33 ^人	(63.5)
B 戦後帰国者	8	(15.4)
C 定住者	11	(21.2)
「郷土史」による補足者	5	
「年輪」による補足者	4	
合計	61	

出典：田島（1990b）

資料：東京在住の正岡五十一氏より提供の資料，文園（編）（1980），
旅の小野津びと会結成五十周年記念編集委員会（1975）

表28 南カリフォルニア奄美会員の出身地

出身地	男	女	計	割合(%)
笠利町(大島)	3	1	4	11.1
竜郷町(")	3	5	8	22.2
名瀬市(")	1	10	11	30.6
瀬戸内町(")	2	1	3	8.3
喜界町(喜界島)	1	1	2	5.6
徳之島町(徳之島)	1		1	2.8
天城町(")	2		2	5.6
伊仙町(")	1	1	2	5.6
和泊町(沖永良部島)	2	1	3	8.3
小計	16	20	36	100.0
不明	2	9	11	
合計	18	29	47	

出典：田島(1990b)
 出所：南カリフォルニア奄美会(出版年不明)などから

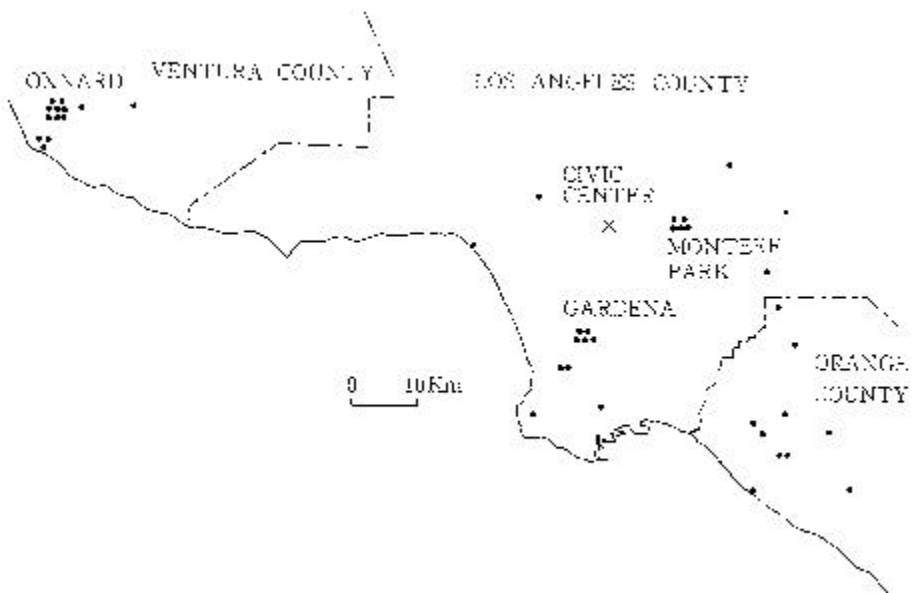


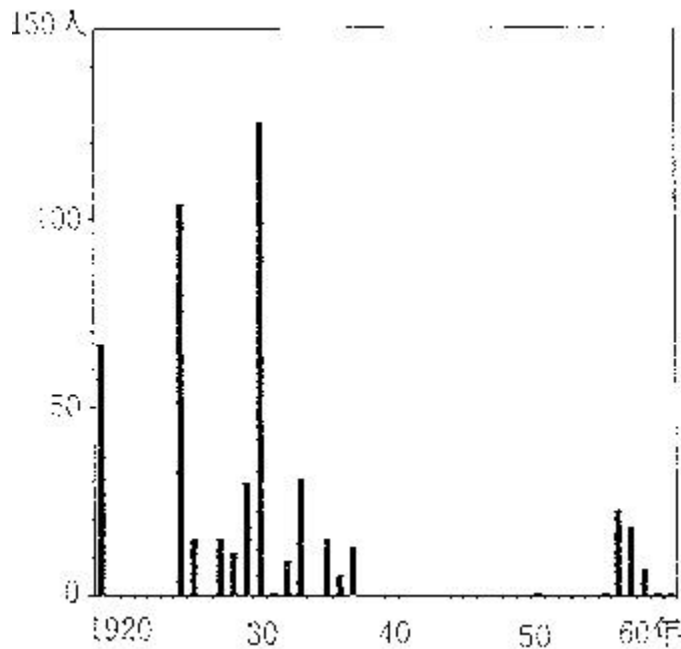
図1 ロサンゼルスにおける奄美出身者の居住分布
 出典：田島(1994)

これは宇検村ですが、彼女達は日系の2世、3世でして、90年代に出稼ぎ者、労働者として来日して、日本で結婚して、宇検村に住んでいるという経過をたどっています。何故そうなったかということについては、戦後、宇検村からブラジルに移住した方がいて、その方は20数年住んだあと、実は宇検村に帰ってきていまして、その方の仲介ということがかなり大きな役割を果たしています。その点だけちょっとふれておきます。

表29 戦前にブラジル渡航者の多かった市町村

順位	市町村名	世帯数	人数
1	坊津町	190	677
2	枕崎市	211	597
3	宇検村	73	440
4	国分市	117	404
5	鹿児島市	85	360
6	隼人町	69	251
7	加世田市	97	244
8	穎娃町	40	181
9	始良町	23	99
10	垂水市	19	92

出典：田島（1997）

図2 宇検村からブラジルへの渡航者の推移
出典：田島（1997）

後半の展開力にいきたいと思いますが、喜界島に小野津という集落があるのですが、その集落の話を中心にいたします。これは戦前、1938年段階の小野津から関西、関東、要するに外へ出た人の総数を示したのですが、戦前は関西が圧倒的に多い（表23）。戦前は一般に関西であったといわれてもいます。その関西に行った人の職業は船員が非常に多かったということが特徴になっています（表24）。次が、織工・鉄工所です。船員が多い。これは何故かというとはやはり先駆者といえますか、最初に出た方がそういう関係の人でそれを頼ってという経過、よくいわれているかもしれませんが、そういう経過をたどってこういう結果になっていると言えるかと思います。関東の方も同じように

職業を示しますと印刷関連ですね、これが非常に多い(表25)。あとは塗粧業というんでしょうか、これも多いですね。とにかく印刷関連が多いというのが関東の特徴になっています。実はやはり郷友会ですが、「旅の小野津びと会」というものが昭和2年にできまして、大阪の九条という所に先程の先駆者がおりまして、同じ集落の人は皆「九条へ九条へ」という状況がありました。東京の方は先覚者というのがやはりおりまして、ちょっと詳しい話はあまりできませんが、この方が最初、大阪へ行って船員になったのですが、2年で辞めて上京し、昼は働き夜は学校という生活をしていて、昼間の仕事が外の仕事では大変だということで、たまたま鉛版屋さん、家の中の仕事である鉛版屋に住み込んだのがきっかけで、その後ずっと鉛版関係、印刷関係の仕事につくようになり、戦後いち早く成功して三晃印刷の社長さんになっています。三晃印刷というのは大手3社につく中堅6社の一つくらいの印刷会社だそうです。

アメリカには戦前から小野津の船乗りの方が中心になってアメリカへ行っているという経過があります。例えば戦前の状況はこういう状況になっています(表26)。これは31名ということになっていますが、実際には61名の方が行っているということがわかっています(表27)。しかし、多くの方は戻ってきています。現在ロサンゼルスを中心に南カリフォルニア奄美会というものがありますが、その会員の数だけみると47名ですね、これは現在といっても10年くらい前の統計です(表28)。その居住地を示しますと、図の通りです(図1)。つい1週間位前、会員の一人から手紙をいただいたのですが、今年のロス奄美会の祝典には200名集まったということを書いてきました。ブラジルの方ですが、鹿児島県では南薩がいちばん多く、国分、隼人あたりが2番目、これに次いで奄美が3番目といった状況で行っております(表29)。移住の時期は図の通りで、昭和初期に最も多かったことがわかります(図2)。

展開力についてですが、若干まとめてみますと、展開力の中身は何なんだろうということをお少し考えたのですが、やはりいろんな状況、プル要因といいますが、そういう中で動いたのは確かですが、その中で個人がかなり対応に努力しているという個人の力といいますが、それがまずあるのではないかと。そういう中で郷友会の結合力の利用というか、それも働いている。結合力も展開力の一部として働いているとそういうことが言えるのではないかと。3点目はやはり先覚者の存在、これはそこへ行く、集まっていくという面があること。以上の3点を考えました。

最後にちょっと、全体的に感じていることですが、私の研究の出発点ですが、最初は実は甑島へ行っていわゆる段々畑ですが、これがあのですが、全部荒れていて、集落へ行くと高齢者が多い。これが70年代の後半ですね。初めて甑島でそういう状況を見て、果たして甑島だけを見ていいのだろうか、地域をとらえるという時に、果たしてそれでいいのだろうかというのが出発点になっています。やはり出た人を含めて、併せてとらえなければいけないのではないかと、これは先程の植村さんの話ともつながるかもしれませんが。それから一つの問題点として、場所の力の性質というのを最初に述べましたが、その強さの程度ですね、郷友会の力、奄美や沖縄は強いと言われていますが、一体それは何なのだろうか、もっと一般的にいうと離島や山村が強いといわれていますが。それから離島でもいろいろあります、長崎にもありますし、北海道にもあります。そういう所と一体どう違うのか、同じなのか。奄美と甑島については私がみている範囲ではあまり変わらない、両方とも非常に強いという感じはしております。それから、奄美と沖縄の違いですね、これもちょっとあるのではないかと感じています。例えば大阪へ

行った時に大阪の郷友会の単位というのは大阪の地域別の単位、何々区とか、あるいはその中の何々町とかの沖繩会、あるいは沖繩県人会というのが強いのにに対して奄美の方は出身集落の単位が強いのではないかと、そういう違いを感じておりますが、それから奄美の中でも当然違います。今日、示しましたように集落によって随分違うということもあります。最後にもう一つだけですが、展開力を南と北の2方向と考えるとすると、私の例で紹介した、アメリカとかブラジルの場合どちらになるのか。ブラジルは南なのか、北なのか。要するに二つで果たしていいのかという問題も感じました。ちょっと駆け足でしたが、以上で私の報告を終わらせていただきます。

引用文献（著編者名五十音順）

- 田島康弘（1990a）：奄美出身者の動向と東京におけるSegregationの形成——喜界島小野津の例を中心に——，鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学篇第41巻，pp. 67～91．
- 田島康弘（1990b）：奄美出身者のアメリカ移住——喜界島，小野津出身者を中心に——，南太平洋研究第10巻，pp. 287～303．
- 田島康弘（1994）：ロサンゼルス奄美出身者の移住と生活，鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学篇第45巻，pp. 1～20．
- 田島康弘（1995）：奄美大島名瀬市における郷友会の実態，鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学篇第46巻，pp. 11～30．
- 田島康弘（1996）：沖永良部島における退職者の生活史，南太平洋研究第16巻，pp. 199～223．
- 田島康弘（1997）：奄美とブラジル移民，鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学篇第48巻，pp. 15～33．
- 旅の小野津びと会結成五十周年記念編集委員会（1975）：年輪．329頁．旅の小野津びと会，大阪．
- 文園 彰（編）（1980）：郷土史，復刻版．364頁，東京．
- 南カリフォルニア奄美会（出版年不明）：会員名簿．

質疑応答

郷地：鹿児島国際大学の社会学部の郷地と申します。きょうゆう会ですか、ごうゆう会で1代目の人は帰って来るけど、2代目、2世代というのでしょうか、その人達が帰るというそういうことはございませんでしょうか。あるいは、2代目3代目というのはちょっと無理かもしれませんが、そういう集まりがあるのかどうか教えていただきたいのですが。

田島：2世もかなり入っております。何故入っているかという、結局1世がいろんな役員につけるのですね。そのことを通じて2世もかなりその後中心的な働きで結局会長などの中心になっているという例はあります。しかし一般に若い人、3世4世になると、どうも関心を示さないという声はどこでも聞きます。